

第76回

健康のススメ

板東 浩

いま私は、南米ペルーにある世界遺産ナスカ・地上絵の上を飛んでいる。レバーを動かし、セスナ機を自由自在にコントロール中。よく知られたハチドリ、サル、手の絵など、驚異の世界が眼前に。あたかもコンドルになって、浮き上がった急降下したりしているかのようだ。

実は、本当にペルーを訪れたわけではない。国立科学博物館で開催された「世界遺産ナスカ展」に足を踏み入れた。そのとき、IT技術を駆使したバーチャルリアリティ（仮想現実）の世界を楽しんだ、というワケ。

地上絵は紀元前2～6世紀に描かれた。以前から「世界8番目の不思議」として考古学最大の謎なのだ。いったい誰が、何のために描いたのか？ 人か宇宙か、古代へのロマンが広がる。

今回、当時のナスカ人の暮らしが明らかに。農業を営み、土器など物作りの技術と文化があった。頭部外科手術を行った頭蓋骨が多く、医学レベルも高かった様子。子供のミイラの黒い瞳の奥に、人々の優しさと純粋な心が宿っているようだった。

生命は自然界の精霊の力を受けると信じ、音楽や踊り、飲酒を伴ったシャーマンの儀式が日常生活だった。神々の世界で万物が自然と融

合する。強力なパワーを持つ動物は、地上ではピューマやジャガー、天空ではコンドルやタカ、海ではシャチという。その時代、生命と豊穡と再生の観念が人々に広く信じられていたのだ。

現代の私たちが学ぶべきことは、宗教的な感謝の心、生物への畏敬の念、そして生命への尊厳の姿勢であろうか。（医学博士、内科医師）

『ナスカの空から』